

脇力士誕生となった。ここから5場所続けて闘協を維持し、127回本場所では9勝2敗をあけて、優勝決定戦では大関鬼ヶ嶽に惜しくも敗れたものの準優勝の成績で三賞を独占した。

その一方で、ライバル照の王は幕下で若ノ嶋に2場所続けて負けて一步遅れを取っていたが、123回本場所新入幕で全勝優勝を飾り、126回本場所では若ノ嶋より先に大関に昇進。若ノ嶋もこれが刺激となり、128回本場所でも7勝、129回本場所でも8勝をあげ、闘協で3場所合計24勝をあげた。

当時すでに3横綱大関と上位が混みあっていたことから、当初綱代理事長は大関昇進に難色を示したものの、錦風親方の涙の訴えや親方衆の後押しもあり大関に昇進。ライバル照の王に後れを取っていたが、ついに肩を並べることができた。

新大関の場所でははるかも勝ち越したが、2場所目に3勝8敗と負け越し。場所後、これまでになく猛稽古を重ね、カド番で迎えた0勝1敗で初の優勝を飾ることができた。

すると135回本場所目の優勝。130回本場所には英、133回本場所には鞍ノ城一人となっていたこともあり、場所後に第23代横綱に昇進した。



135回場所後横綱昇進の伝達式

紙相撲界には、三役会、大関会、横綱会と呼ばれる謎の組織があり、若ノ嶋入門前は錦風部屋力士の最高位は小結で、主要の親方衆が大関会、横綱会のメンバーであった中にある。錦風親方は理事でありながら自身の狭い思いをししてきたが、若ノ嶋の横綱昇進により親方としても晴れて横綱会入りが叶った。

夢だった横綱に昇進した若ノ嶋だったが、ここから長い苦難の道が始まった。

若手の台頭が激しく、137回には美空富士と春ノ翔の桐壺部屋2人が大関に同時昇進すると翌138回には同じ桐壺部屋の支那虎が大関に昇進し、若ノ嶋は優勝争いどころかやっとのことで勝ち越すという苦しい場所が続いた。

また、137回、144回、151回では前半戦に黒星が先行して途中休場を余儀なくされた。横綱としての負け越しはなかったものの、147回では5勝5敗で千秋楽を迎え、この横綱美空富士戦に勝ってからも勝ち越すという場所もあった。

横綱になって最高でも8勝と苦しい場所が続いたが、153回本場所には横綱になって初めて10勝をあげ、優勝決定戦で惜しくも弟子の佐賀ノ海に敗れたものの大復活を果たす。翌153回本場所でも連続で10勝をあげて、横綱として18場所目にして初の優勝、通算3度目の優勝を飾った。

しかし、翌場所から再び低迷、157回では5勝4敗と白星先行の成績だった。10日目から自身5度目の途中休場と脳裏には「引退」の二文字がよぎるようになったという。

圧巻だったのは休場の明けの158回本場所。この場所は3横綱（千代鈴、若ノ嶋、春ノ翔）の1大関（大神楽）の番付だったが、8日目を終えて若ノ嶋が1敗したのみで他の3人が



↑10日目、前日千代鈴に敗れ1敗となった大神楽との1敗対決も若嶋が横綱の貫禄を見せて完勝。千秋楽の逆転優勝に望みを繋げた。

→9日目、全勝春翔と一敗若ノ嶋の横綱対決。優勝のためにはもう負けられない若ノ嶋が力対力の横綱相撲を制して踏み止まった。

8戦全勝という稀に見る横綱大関の総当たりによる優勝争いとなった。

最後は若ノ嶋と春ノ翔の優勝決定戦となった。これを制した若ノ嶋が10勝1敗で4度目の優勝を逆転で飾った。



↑10勝1敗横綱同士の優勝決定戦は史上初。若ノ嶋は本割りでこの勢いそのままに春ノ翔を力強く寄り切った。

→千秋楽結びの一番は1敗で並んだ千代鈴若ノ嶋の一戦。千代の出足に圧倒されながらも若嶋が辛勝。春ノ翔との決定戦にもつれ込んだ。



若ノ嶋○(押し倒し)●千代鈴



西神門○(押し倒し)●若ノ嶋

この優勝が若ノ嶋としてのピークだったかもしれない。翌場所から全休を含め3場所連続で休場。休場明けの162回は「進退を賭けて臨む」と宣言して土俵に上がる。

その覚悟が白星に結びつき七日目までに5勝2敗としたものの、そこから3連敗して5勝5敗で千秋楽を迎える。

千秋楽結びは横綱千代鈴との対戦。千秋楽の朝、「この一番に負ければ引退する」との決意を錦風親方に告げて土俵に上がり、見事

勝利して現役続行となった。

翌163回では横綱千代鈴、大関西神門との3人による優勝決定戦となり、優勝を逃すもまだやれるとの感を強くしたという。

そして、36歳で迎えた今場所（165回）、協会創設以来史上初の5横綱となる中で見事に5度目の優勝を飾り最古参横綱の意地をみせ、連続優勝が期待される中で電撃引退発表となった。18年8ヶ月の土俵人生だった。

115回（平成19年1月）初土俵
121回新入幕、123回新三役
130回新大関、136回新横綱
優勝5回、優勝決定戦5回（内2回優勝）
三賞5回（殊勲2、敢闘2、技能1）
横綱在位30場所（歴代2位）
幕内在位45場所（歴代5位タイ）
通算成績322勝176敗（歴代5位）
幕内成績286勝167敗（歴代3位）

初土俵からしばらくは左差しの一辺倒で差しが鋭い出足を信条としていた一方で投げに弱く、特にのど輪にはめっぽう弱かった。早い相撲で勝負をつける相撲も多かったが、スタミナがあり不利な体勢になっても長い相撲で持ちこたえた末に勝つ相撲も見られ、水入りの相撲で勝ったこともあった。

大関横綱に上がる頃は左差しの体勢になれないことが多かったことから、長所である出足に加え、稽古で右のど輪を身につけるなどして相撲の幅を広げて若手の台頭に對抗したのが寿命を延ばせた要因だろう。

現役時代、英、鞍ノ城、蛭勇、美空富士、春ノ翔、千代鈴、大神楽、西神門の8人の横綱と対戦。歴代横綱で8人もの横綱との対戦があったのは最多。

思い出の取組は、と聞くと次の3番をあげた。

○115回本場所初日の照の王戦

「青木道場」で毎日血のにじむような稽古に励んだ盟友との紙相撲界での初対戦。